

マスターズ競歩のレジェンドを探る

本誌の表紙は新しい年の2月号。だが、暦の上では巳年の1月だ。マスターズ会員の皆さんは新たな気持ちでマスターズ陸上に取り組む姿勢を見せているはずだ。今月号はマスターズ種目のなかから競歩に焦点を当て、競歩で活躍している選手を全日本マスターズ競歩大会の開催地である岩手マスターズ陸上競技連盟の八重樫輝男会長に人選してもらった。

岩手出身の五輪日本代表 高橋英輝さんが号砲を鳴らす

2024年の全日本マスターズ競歩は10月14日のスポーツの日に、岩手県北上市の北上総合運動公園・日本陸連公認競歩路で行われた。実施種目は35km W、20km W、10km W、5km Wだが、各種目の成績は12月号のマスターズ情報(p207)を参考にしてほしい。

競歩といえば岩手マスターズ陸上競技連盟会長の八重樫輝男さん(85歳)だ。学生時代の1959年から競歩に打ち込み、マスターズに競歩を持ち込んだのも八重樫さん。地元の岩手に全日本マスターズ競歩を定着させたのが2004年から。選手について聞く前に全日本マスターズ競歩大会の会場の模様を――。35km Wと5km Wのレースで会場がどっと沸いた。スターターが高橋英輝さんだったからだ。高橋さんといえば16年のリオ五輪と21年の東京五輪に出場。20km Wの日本代表として国際大会で活躍した選手である。

昨年(24年)の夏、富士通を退社し、出身地の岩手県に戻り、県北部の小学校に勤務している。多忙にもかかわらず会場に駆けつけて、選手たちを激励した後、スターターを務めた。

大会総務だった八重樫さんは、高橋さんに対し「ただただ感謝の一言です」と述べた。

優れたマスターズ・ウォーカーの皆さん

まずは男子20km Wを1時間43分37秒で歩いて1位になった樋熊敬史さん(M40・新潟)。このタイムは

M40・20km Wの日本新だ。2024年3月31日までの同日本記録は1時間54分36秒となっており、かなり評価の高い日本新である。

さらに樋熊さんは2週間後の10月27日の第61回全日本35km W高畠大会(山形)に出て、完歩する健闘を見せた。また、全日本マスターズ競歩の35km Wに過去、連続出場していた田中達也さんも樋熊さんと同じく高畠大会に出場、完歩を果たした。

樋熊さんや田中さんだけでなく、かつて日本陸連主催の日本選手権に出ていた人のなかには、今回の岩手大会10km Wで55分25秒を記録し、1位となった大森健一さん(石川)がいる。大森さんは62歳。M60クラスで断然のトップだった。

全日本マスターズ競歩の大会創設以来、活躍しているウォーカーに八重樫悟さん(茨城)がいる。現在、75歳でM75クラスだ。24年の全日本マスターズ競歩では35km Wに挑み、全体の16位、M75クラスでは5時間01分02秒の2位だった。同じクラスでの1位は5時間00分47秒の日本マスターズ創設記録を出した藤岡保さん(75

歳・三重)。

創設記録というのは23年からルールが改正され、従来の50km Wが35km Wに変更されての記録。

だが、50km Wが実施されていた頃、該年代クラスで連勝を続けていたのが八重樫さんだ。M55クラスの5時間19分46秒を皮切りに、M60、65、70各クラスで大会記録を残した。35km Wでは、74歳で出した4時間44分22秒が、M70クラスの大会記録かつ日本記録である。

なお、先に述べた八重樫さんの50km W記録のうち、M55クラスほか、M60の5時間31分21秒、M65の5時間33分47秒、M70の6時間09分24秒は全日本マスターズ競歩の大会記録だけでなく、日本マスターズ日本記録でもあった。

佐々木茂さん(71歳・青森)も推したい一人だ。全日本マスターズ競歩の5km Wでは、M60・26分22秒、M65・28分43秒、10km WではM60・53分30秒、M65・1時間00分47秒の各大会記録を持つ。5km WのM65以外は日本マスターズの日本記録でもある。



全日本マスターズ競歩でスターターを務めた高橋英輝さん(中)、岩手マスターズ会長の八重樫輝男さん(左)、八重樫悟さん(右)。悟さんは輝男さんの甥にあたる
(写真提供/岩手マスターズ)

競技だけでなく、朝一番の5kmWに出場した後、競歩審判として大会運営に協力している人でもある。

父子のウォーカーとしては岩手の菊地寿さん（57歳）と拓人さんがいる。父親の寿さんは5kmWのM50・27分09秒、M55・26分14秒、拓人さんはM-24・5kmWで27分31秒、M-24・10kmWで53分09秒の日本マスターズ日本記録を持っている。拓人さんが記録を出したときは両種目とも22年、24歳のときだ。

寿さんも5kmWだけでなく、10kmWでもM45・53分48秒を48歳で、M50・56分51秒を50歳で日本マスターズの日本記録をつくっている。今大会ではM55・35kmWに挑戦、3時間53分12秒の日本マスターズ創立記録で全体の3位、M55クラスでは1位の成績だった。

女性ウォーカーとして活躍している有望選手

女性で活躍している競歩選手のなかで特筆されるのは佐藤奈緒美さん（59歳・北海道）だ。まだ全日本マスターズ競歩に50kmWがあった時代、54歳とW50クラスでは不利な年齢にもかかわらず、6時間43分41秒の大会記録を残し、一昨年の23年大会ではW55クラスの35kmWを4時間56分59秒で制した。50kmWの記録は日本記録でもあった。



2024年全日本マスターズ競歩W55 20kmWを制した佐藤奈緒美さん（写真提供／岩手マスターズ）

24年大会はW55クラスの20kmWに出て、2時間32分13秒で1位になった。佐藤さんの日本記録としては、08年に46歳で出した10kmWの1時間06分24秒が残っている。

24年大会には姿を見せなかったが、松本初枝さん（千葉）の活躍も見逃せない。まず日本マスターズ日本記録を見ても、5kmWではW75クラスで33分55秒を記録したのが17年全日本マスターズ競歩。75歳だった。

10kmWではW70クラスの1時間11分02秒を16年大会で。年齢は74歳。75歳になった17年大会では1時間13分17秒を。さらに81歳で出場した23年大会ではW80・1時間17分07秒のそれぞれクラスの日本記録をマークしている。

これだけではない。20kmWにおいては、日本記録をつくったのが11年全日本マスターズ競歩でのW65・2時間19分23秒で69歳。年齢的に不利な条件だったが、よくぞ日本記録を、である。

以上のことから「よく活躍している」と八重樫会長は絶賛している。

近年では女性競歩者の活動が目立つが、なかでも矢澤美代子さん（長野）と増岡美由紀さん（60歳・奈良）が目立っている。矢澤さんは5kmWで2クラスの日本マスターズ記録を全日本マスターズ競歩で出した。67歳で出場した19年大会はW65クラスを31分42秒で完歩。70歳での22年大会では32分53秒だ。

増岡さんは昨秋の24年大会の10kmWのW60クラスで優勝した。タイムは1時間08分57秒だった。増岡さんが10kmWと20kmWで日本記録をつくったのも岩手の全日本マスターズ競歩だ。

10kmWのW50クラスの1時間05分50秒は16年大会で。W55の1時間05分25秒は19年大会で出した。種目が変わって20kmWではW50クラスの2時間21分56秒を18年大会で。W55クラスの2時間31分04秒は22年大会でのもの。

トラック競技での競歩で活躍しているウォーカー

トラックでの競歩で活躍が目立っている選手を全日本マスターズの山口（23年）、京都（24年）両大会から見ると――。

山口大会ではM30クラスの出羽賢太朗さん（大阪）、M40では杉本明洋さん（京都）、M45の牧野晋一良さん（東京）および辻本始さん（奈良）、M55での先述の菊地寿さん、M75で久村隆一さん（北海道）、M80では浅野輝彦さん（神奈川）ら。

京都大会ではM60クラスの大森健一さん（石川）、同じ石川でM70の竹俣修さん、M75の北海道は久村さん、M80では堀田義彦さん（大阪）、最後にM85の岩手マスターズ会長の八重樫輝男さんだ。いずれも該当クラスでの上位成績を収めている。

以上のうち、出羽さん、杉本さん、浅野さん、八重樫さんはインターハイや国体（現・国民スポーツ大会）などで上位入賞の経験がある。久村さんは70歳代になって競歩に取り組み、歩型・速度とも急速に進歩を示した。

八重樫悟さんの声

「24年の全日本マスターズ競歩大会のM75・35kmWで2位でした。黒星は15年ぶりだったか。25年大会では雪辱して、M75クラスの日本記録をつくりたい。私の郷里は岩手です。八重樫輝男さんに勧められて、高校1年生から競歩を。日本陸連主催の日本選手権競歩では73年と75年に2回優勝しました。

私たちの高校生のときは、まだインターハイに競歩はなく、残念でした。マスターズへはM55クラスになった頃、入会しました。練習ですか？ ほほ毎日、15～20kmほど歩いたり、走ったりしています。10月の全日本マスターズ競歩でお会いしましょう。皆さんとお会いできるのを楽しみにしています」